

記主禪師特輯號發刊餘言

前 田 聽 瑞

惟ふに吾國淨土文化の蔚興と共に、選擇傳弘の大家たる譽を荷ふべきものは、正に吾が三祖記主禪師然公であらねばならぬ。然公學問の博大、光顯の摯實、願行の深重、教化の普及は少く指を宗學に染めんもの、齊しく知る所、その顯密に博涉し教禪に貫練し、殊に二祖大紹正宗國師の附法として宗脈三代の法統を嗣ぐや、主一無適、宗風顯彰の外何物をも顧みず、自行には六萬の日課を修し、化他には五十年の講說、五十餘軸の述作、加ふるに四來の俊秀山門常に市をなし、達識の才、宏博の士濟々として桃紅李白互に芳を競ふの盛觀は實に超倫の學徳を有する大士にあらずんば得て企及すべからざる所、緇素歸敬渴仰せざるなく、後年記主禪師と追謚せらるゝ所以のもの、蓋し偶然でない。忍激上人の言に

然師諱良忠、姓藤氏、石州人也。慧解天縱、博達強記。始學顯密、終歸淨土。曾師事辨公也。二年而盡傳水器而歸矣。持名之餘以著述爲任。故報夢筆作五十餘卷直規濫吹之罪一悉剪蕪蕪之蔽天下一定。若微斯師淨土之教殆弗昭昭。其功可謂盛矣。

この讚評固より謚言でない。

吾が宗は、昭和十二年三月、記主禪師の六百五十年の大遠忌を嚴修せんとしてゐる。瑞峰華頂の翠光濃かなる頃、仰いで記主傳弘の恩を念じて宗光闡揚のために志勇精進、常行法施の志願を成滿するの日も今や三年の後に逼りつゝある。茲に六百五十年の遠忌を邀へんとして、仰いで師恩を念ずるとき、身を碎いても之に報ずる覺悟がなくてはならぬ。

六百五十年忌は斯くの如くにして意義極めて深長である。此意義を顯彰して、宗學の尊嚴を發揮せんがために、佛專文書部の當事者は、再三審議、以て「記主禪師特輯號」の發刊を企圖するに至つた。しかもその名實相副はざるは寄稿家各位の雄篇を滿載するの餘力なきの致す所、希くば有心の君子、憐察し高助を贈りて吾が部をして雄飛の幸あらしめよ。尙ほ茲に特記して置きたいことは、先年來吾が佛敎專門學校敎授各位が金澤文庫に於ける淨土敎關係の文獻探閱をその檢究である。吾等は石橋・小西・千葉・塚本・惠谷等の各學匠が志願倦むことなくこの勝業を成滿して宗風顯彰に資せんとするの深きに隨喜渴仰しつゝある。その篤志唯感銘を益すのみ。

然るに惠谷隆戒君は篤學搵まず、精進息まず、孜々兀々としてその研究の結果を吾が文書部のために寄せ來つた。但だ憾むらくはその雄篇『然阿良忠上人傳の研究』をこの「記主禪師特輯號」に掲載するの資儲なきことだ。幸に同君は近く金澤文庫淨土宗典研究第二輯「然阿良忠上人傳の研究」をして別に世に問ふこと云ふ。内容は親しく三祖然阿上人の講席に侍した良聖の速記録即ち『論註聞書』・『玄義分聞書』・『定善義聞書』・『往生禮讚聞書』・『群疑論聞書』等の新資料と史跡踏査とに依りて然阿良忠上人の傳を書き直したさいふから、斯學に取りては鮮からざる功德である。首を延してその書の出づるを待つ。

終りに本號は吾が佛敎專門學校敎授各位並に關係者諸彦の後援及び文書部理事諸君の努力によりて、茲に刊行の擧を見るに及ぶ。記して以て甚深の謝意を表すこと云爾。

佛敎專門學校文書部

部長

前田 高田 浦上 加藤 文野 阪口 眞龍 龍寛 寛博 龍聽
瑞天 心照 幢道 良